4　満洲語西欧解剖学書『欽定格體全録』について

渡辺　純成
東京学芸大学

17～18 世紀東アジアにおいて，イエズス会士が当時の西欧の数学・数理天文学・軍事技術・医学・解剖学などをもたらした．前二者が中国本土を経由して東アジア全域へと拡散し，19 世紀後半の本格的な近代科学――数学・物理学など――受容の礎のひとつとなったことは，広く知られている．その際には清朝宮廷の積極的な関与があったが，当時の宮廷の第一言語が満洲語であったことを反映して，西欧諸言語から満洲語に訳され，それから漢語ないしはモンゴル語に訳された科学技術文献があった．そのひとつとして，17 世紀西欧の解剖学と臨床医療とを紹介した 18 世紀初頭成立の『欽定格體全録』（この漢字表記には問題があるが，かりに従う）があることはつとに知られていた．しかし，その図版はともかくも，本文の内容の詳細はあまりよく知られていない．満洲語言語学／文献学の立場からなされた先行研究がほとんどでであったためである．講演者は，日本所在の写本 3 種，フランス所在の写本 1 種，ロシア所在の写本 1 種の内容を調査し，写本の系統を推定し，解剖学的内容を検討した．本講演ではその結果の一端を述べる．

解剖学的内容に関していえば，17 世紀西欧における諸発見に基づく，リンパ液とリンパ管，膵臓と膵液，腎小体と卵胞などに関する記述が，動物実験の詳細とともに与えられている．記述の網羅性には問題があるが，啓蒙書としては興味深い読み物になっている．また，血液循環説（Harvey）や不感蒸泄などの生理学上の新知見が，Descartes のさまざまな医学理論――穏和な人体機械論や，精神と身体の媒介点を松果体とする学説――などとともに，紹介されている．王宏翰『医学原始』に反映されたものよりも，はるかに新しい西欧医学を反映している．記述は局所解剖学の配列に従っているが，康熙帝の介入によって，中国的な順序に変更された．「腺」「膵臓」などの術語は，満洲語の固有語彙と哺乳類の比較解剖学の知識とによって，造語なしに訳されており，満洲語における解剖学的語彙の豊富さを述べる編訳者 Parrenin の回想が事実に基づくものであったことがわかる．この豊富さは，満洲人のモンゴル的伝統の現れであったとみてよい．『欽定格體全録』は，漢訳されなかったがモンゴル語訳されていることも，大域的に見れば，そのモンゴル的伝統のひとつの現れであろう．

編訳者がイエズス会士であることから想像されがちな宗教色は薄く，削除し易いかたちで，冒頭の僅かな章に集約されている．宗教色は，むしろ後年のホブソン『全体新論』のほうが強い．しかし，この僅かな章で典礼問題に関する教皇庁の立場が擁護されており，それが，『欽定格體全録』が漢訳されなかった理由のひとつであると考えられる．また，数学書では清朝側による科学的内容の確認が実質的に機能していたが，解剖学に関しては，当時の中国本土で人体解剖が（少なくとも表向きには）行なわれていなかったため，清朝側が記述の可否を確認することは不可能であった．これも漢訳されなかった理由のひとつであろうと考えられる．

17 世紀後半～18 世紀前半の清朝宮廷におけるイエズス会士の文化的活動は，西欧と漢字文化圏とのあいだの文化交流として捉えられる傾向があるが，『欽定格體全録』には，清朝のモンゴル的伝統が強く現れている．この時代の清朝は，漢字文化圏に包括された一部分ではなかったのである．この時代の東アジアの西欧科学受容の政治的／社会的側面を分析する際に，（特に大陸部においては）エスニシティの複雑さを考慮すべきことも，『欽定格體全録』にまつわるさまざまな事象からわかる．